

---

# ジオ興しチーム北部エリア

レポート 熊野川九里峡

福田将志

---



## 世界遺産「川の参詣道」

熊野川町田長（たなご）の道の駅は世界遺産「川の参詣道」川舟下りの出発点だ。

かつて、熊野三山を巡礼する人々は熊野本宮大社を参詣した後、熊野速玉大社、熊野那智大社を目指した。中でも上皇様や如意輪様、一部の位の高い方々は川舟に乗り速玉大社前の権現川原へと下った。

九里八丁と呼ばれた航路、約37kmを約4時間もかけてゆっくりと下ったそうである。そして現在、その半分の約16kmを約90分、語り部の案内とともに神々の足跡を巡るのが熊野川川舟下りである。滝や奇岩奇石を見ながらの船旅は古いにしえの時を満喫できる。



さて今回は、その出発点より少し戻ってご紹介しよう。

国道168号線を本宮から新宮方面に田長トンネルを抜けて100m程進んだ右側に大きな岩が現れるのをご存知だろうか？これは流紋岩質火砕岩（マグマが噴き出し固まった）の大岩壁である。国道からは近すぎて、その全容はよくわからないが、対岸の和気一浅里線から見れば全体像がよく把握できる。

「その形状、猛獣の如き勢を示す」と紀伊国名所図会に記述されているこの大岩は、なるほど大きな猪が山から走り出てきたかのように見える。川から見ればその姿に驚くばかりであっただろう。

さあ、いよいよ川を下って行こう。

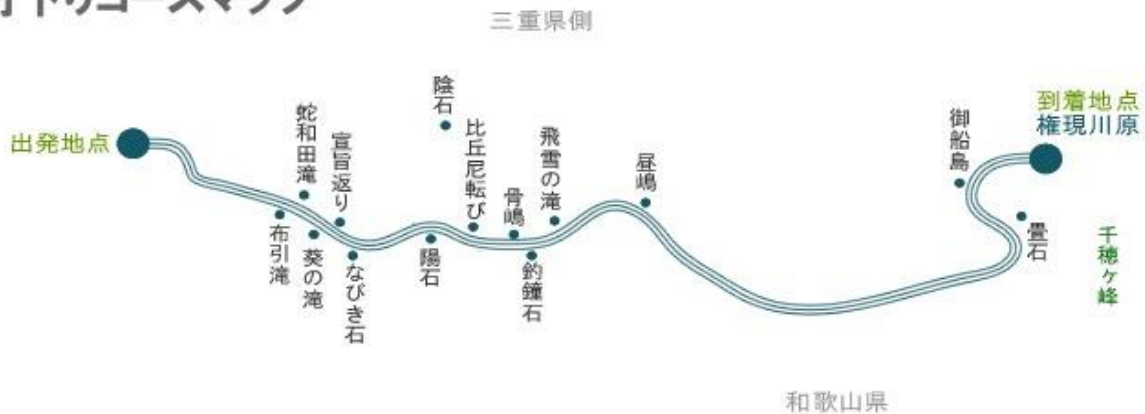
前回の日足のレポートでもご紹介があったが、十津川から流れてきた熊野川はここより上流で志古付近で川幅が広がっている。そのまま行くと河口までさらに広がるのが通常の川の風景なのだが、この熊野川では熊野酸性火成岩が下流に現れるため、この先、川幅が極端に狭くなり、そこを縫うように川は流れる。なので他では見られぬ景観が楽しめるのだ。

## 舟下りのコースについて

古のときを満喫できる約90分の川舟下りは、新宮市熊野川町から新宮市街地権現川原までのコースです。



## 舟下りコースマップ



※舟下り体験の出発地点は、和歌山県新宮市熊野川の川舟センターから新宮市の熊野速玉大社付近の権現川原までとなっております。

約90分の川舟下りコースをここで全て紹介するわけにもいかないなので、抜粋してご紹介させていただくことにしよう。

### 一飛鉢峯一

「あの山は'飛ぶ'鉢'の峯と書いて「飛鉢峯（ひはつがみね）」と言います。昔、あの山の<sup>せんねんしょうにん</sup>上に専念上人というお坊さんが修行をしておりました。後白河法皇に祈禱を捧げた事でも有名である。そんなお偉い方でも食事はされるもので、しかし食事のために朝昼晩とあの険しい山を降りてくるわけにはいきません。そこでどうしたかという、山の頂上から縄で縛った鉢を川へ向かって降ろしてきたんだそうです。当時は水位も高く、川幅いっぱい水が流れていた、熊野詣でに行き交う人々がその鉢にお布施をしたんですね。

そして、専念上人はその鉢を頂上まで引き上げていた。

その様を見た人が『おい！鉢が空を飛んでるで』といったのでしょうか、後に飛鉢峯と呼ばれるようになりました」

飛鉢峯の一節である。

今でももちろんその山はあり、山頂には護摩炊きをしたらしいという場所が残っているそうだ。その山の中腹には「陰石」と呼ばれるデルタ上にくぼんだ岩体がある。ほぼ直

---

角の絶壁であるためその中がどうなっているのか覗き見ることはできないが、対岸にある陽石と対なのだそうです。

余談であるが、僕は予てから鉢を山頂から下ろすことができるかどうか？検証してみたいと考えている。しかしこの山に登るには崩れてしまった小鹿谷から登るか、子ノ泊山<sup>ねのどまり</sup>から降るか、何れにしても道無き道に行くしかない。（この無謀な凶行に同行したい方は私、福田までご連絡をください）

いくら水位が今よりも高かったからといって頂上から降ろした鉢が旅人の舟まで届くわけがない。しかも飛鉢峯の下には小鹿という集落が存在する。浅里の尾崎新一郎さんという方が書き残した「浅里郷」に納得のいく一説が書かれてあるのでご紹介したい。

「保元平治の頃（1156～1159）専念上人が小鹿に近い森に堂を建て修行をされたと言う。・・・専念上人が西の峰に求道の館を築いていた頃、小鹿の里人は小鹿谷から水を引き二町程の稲作を既に行っていた。百姓たちは五穀を献上して上人の修行のたつきを支えていたと考えられる。専念上人も街道脇の大木の枝に鉄鉢を吊り下げて旅人に喜捨を呼びかけ存在を誇示していた。」

なるほど。これが飛ぶ鉢の峯の本来の説なのだろう。

この話には続きがある。

「ある日、いたずらな筏師は自分の汚い濡れ草鞋をその鉢に入れたそうです。その筏師は罰が当たったのでしょうか。後日の舟下りの際に竿先を誤って淵の中へ入り込んでしまいました。そして七日七晩、漕いでも漕いでも抜け出すことができなかったそうです。以来その淵を七日巻きと呼ぶようになりました」

今では水位は下がってしまってその淵は存在しないが、その昔は大きな淵だったらしく、川で何か事故が起こるとその骸は七日巻きに流れ着くと言われていたそうである。そこで暮らす人々と、旅人によって伝承は変化しながらも語り継がれていくのだろう。



飛鉢峯。この山の頂上で専念上人は修行をしていたと言い伝えられている。

この他にも、「骨嶋」や「釣鐘岩」「比丘尼ころび」「昼嶋」など、その言われについて興味深い話はそれぞれあるのだが、ここでは省略しよう。

(ご興味がある方は熊野川川舟下りをご体験くださいませ)

## 一 浅里の郷一

釣鐘岩の付近はとても波が穏やかで水位も豊かであるが、このすぐ先は川を絞るかのように急に行路が狭くなる。しかも激流、通称「まな板の瀬」だ。

生きの良い魚をまな板の上に乗せた時、魚はピチピチと跳ね上がる。この瀬では舟がまるで魚のごとく跳ね上がるのでそう呼ばれるようになったらしい。川舟下りのお客様はここで歓声をあげる。特に外国人の方々は大喜びだ。船頭の腕の見せ所であるのだが、船頭からすればできれば通りたくない場所らしい。無事に通過できますようにと念仏を唱えながら下るから「念仏の瀬」と呼ぶ船頭もいる。

そのまな板の瀬の左側に広がっている集落が「日本の里100選」浅里の郷である。

浅里の郷の名物「飛雪ひせつの滝」の水は一年中枯れることはなく、滝の下にはキャンプ場があり夏場は多くの人で賑わう。

「浅里の見た千石」と呼ばれる棚田では現在も飛雪の滝百姓塾の若い衆(60代)が飛雪米という美味しいお米を作っている。浅里の棚田は実はここだけではない。飛雪の

滝の奥にも立派な棚田が広がっているのだが、切り立った山の奥にあるので知る人は少ない。それが「浅里の隠れた千石」である。

紀宝町誌の地質図（後誠介先生監修）を見ると紀宝町の山のほとんどは熊野酸性火成岩類（マグマでできた岩体）であるのがわかる。しかし、浅里付近や大里、桐原では熊野層群（比較的浅い海底でできた堆積岩）が分布している。その平地を利用して人々は棚田を作ったのだろう。

さて、話を「浅里の隠れた千石」に戻すが、浅里の郷は熊野川から順に、棚田があり民家がある。そして、その後ろは熊野酸性火成岩類の切り立った山々である。実際に飛雪の滝は絶壁でその奥も同じような険しい山が広がっているのだと想像できる。しかし、滝の上を登っていくと棚田が現れる。「浅里の隠れた千石」だ。その棚田はずっと奥の子ノ泊山の登り口まで続いている。

地質図を見るとこの辺りも堆積岩であるのがわかる。昔の人々は険しく切り立った山の奥にあるこの平地を利用して棚田を作り、生きるために年貢をごまかしてきたのだろう。地形と人々の暮らしが密接につながる歴史がここで感じられる。



花崗班岩の大岩を上手く活用した石垣。「浅里の隠れた千石」集落跡

## 一川の参詣道一

川舟下りも終盤に差し掛かったところで航路の正面に千穂ヶ峰が現れ舟は大きく左へ蛇行する。神倉神社の裏側にあたるこの場所で火成岩の細かい柱状節理（岩が一本一本の柱のように見える）に出会う。通称「畳石」だ。ここで船頭はモーターを止め櫂を漕

ぎ、語り部は歌や篠笛を演奏する。古の旅を彷彿させる演出だ。岩に反響する笛の音、舟底を静かに叩く波の音、春にはウグイスも共鳴する。「感激！素敵！」「ええわだよー！」「bravo！」お客様の拍手と歓声上がる。



古の旅を彷彿させる船頭の櫂さばき

古の時を満喫し、御船島を回った後、舟はようやく権現川原にたどり着き約90分の船旅が終わる。

僕は川舟下りの語り部を始めて七年になるのだが、お客様の残念そうな顔は今までに一度も見たことがない。どんな悪天候の時でも（雨だから見られる素敵な風景があるのだが）皆さんニコニコと満足げに下船される。それは自然が織りなす神々の力なのだろう。ただただ感謝するばかりだ。

川は季節のよってその表情を変える。天候によってもその美しさは変化する。風が穏やかな時には川面は鏡のように山の緑を映し出し、舟先がその緑を静かにかき分け進む。後方には舟が通った波が立ち、川鶺や白鷺がその波を追うように羽ばたく。川岸には四季折々の花が静かに彩り旅人の心を癒す。美しい、本当に美しい。

ここ数年で外国人のお客様が目立つようになった。昨年ではなんと日本人のお客様の数を上回る月もあったようだ。なんとも誇らしいことである。しかしとても残念なことがある。写真のように本来は青く澄んだ熊野川であるが、このような状態は稀で、泥水のように茶色く濁ってしまっている日が多いのだ。その原因は決してダムのせいばかりではないのだろうが、十津川第二ダムから流れ出る濁流を見ればここを止めれば綺麗になるのじゃないのかと単純に思ってしまう。

海外からいらっしゃるお客様の多くはこの川を写真に撮り、SNS等にアップする。コーヒーマシンのような色をした汚れた川が世界遺産「川の参詣道」として世界中に広がっているのだ。なんとも悲しい、やりきれない。

僕はジオ興しの活動を通して、この現状を多くの方に知っていただきたいと思っている。そして、ここから何か解決策が生まれることを願っている。

---

福田将志